
無駄話

ぞろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無駄話

【Nコード】

N80660

【作者名】

ぞろ

【あらすじ】

休み時間、バカが話しかけてきた。
そんなダラダラ、グダグダな無駄話。

「うう、腹減ったー」

休み時間、俺の席にバカがやってきた。

こいつとは一応友人って関係だ。

不本意なことこの上ないが。

まあ、しょうがないから少しくらいは相手してやるか。

俺は、その奴の方に意識を向ける。

「腹減ったー」

同じことを繰り返す言うこいつに俺はため息をつく。

「まだ1時間目終わったばかりじゃねえか。

いくらなんでも早すぎだろ」

「寝坊しちゃって、朝飯食ってねーんだよ。

今度ばかりは遅刻できないし」

「ああ。

お前そついや言われてたな。

トイレ掃除だっけ？

どうせ無駄なあがきなんだから、遅刻してでも食ってくりゃ良か

つたじゃん」

「無駄とはひでーな。

俺はやりますよ。

誰がトイレ掃除なんてやるかつ！」

ぐつ、と拳を握り宣言する奴だが。

まあ、無理だろ。

明日になりや、そんな決意も忘れてる……。

おつ、そうだ。

いいこと思いついたぞ。

うまくこいつを陥れれば……。

「大した自信だな。

じゃあ、賭けるか？

お前が今学期遅刻するかしないか。

負けた方はジューズおごりで」

俺の提案に、奴は少し考えだした。

が、元々足りない頭だ。

長く考えるなんて芸当が出来るはずもない。

「よし、いいぜ。

その賭け乗った！」

ほらな。

すぐ結論が出てきた。

ふっ、これが罠とも知らずに愚かな奴め。

「じゃ、決まりな。

負けた方はクラス全員の分のジューズおごり、と」

「ちよ、ちよと待てい！」

「何だ。学年全部の方が良いのか？

チャレンジャーだなお前」

「んなこと言つてねえ！

お前の分だけじゃねーのかよ？」

「そんなこと言つてないし。

じゃあ、負けた方は全学年の全クラス分、プラス先生たちの分の

ジューズおごり、と。

はい、決定」

「さらに悪化！？」

「うるさいな。

お前は何？

自信ないの？」

「うっ」

俺の一言に、奴がひるむ。

「勝てばいいんだからよ。

それともさっきの自信はなに？

口だけ？

マウスオンリー？」

「うぐぐ……」。

おーし、いいぜ！

その賭け乗ってやる！」

ニヤリ。

取ったぞ、その言質！

くつくつくつ……」。

俺にかかればこんな馬鹿一人、手玉に取ることなど造作もない。

「よーし、決まりだな」

バカめ。

全校生徒味方に引き込んで妨害してやるからな。

お前は戦う前から負け犬ムードだったのだ。

「ん？」

何か言ったか？」

奴が聞いてくるが、当然俺はごまかす。

「よーし、決まりだなって。」

「いやその後」

「別に何も言ってないけど？」

「そうか？」

なんか聞こえたと思ったんだけどな。

じゃ、気のせいかな」

くつくつくつ……」。

愚かな奴め……」。

俺は奴に気づかれないようにほくそ笑んだ。

翌日。

俺はジューズおごりを餌に、クラスメートたちを味方に引き込んだ。

そしてそいつらと共に、奴の通学路で待ち伏せを決行。もちろん、奴が来たら妨害するためだ。

しかし、奴は一向に現れず、時間だけが過ぎていく。

このままだと俺たちも遅刻になってしまうので、仕方なく教室へ戻ることにした。

俺たちが教室へ入った後、先生が来て朝のホームルームが始まった。

だが奴が現れることはない。

気になった俺は、先生に質問してみた。

「先生、あのバカはどうしたんスか？」

「ああ。あのバカか……」

「つーか、先生にまでバカで通じる奴ってどうなんだ。

奴のバカは学校公認ってことなのか？」

とか俺が思っていると、先生が奴について話してくれた。

「あのバカは今保健室だ。

学校に泊まって風邪を引いたらしい。

まったく冬も近いというのに、なんで学校に泊まろうなどと考えたのか……」

「……ああ、それは多分。

「バカだからじゃないスか？」

「そうか。

バカだからか」

俺と先生は頷きあった。

「つーか、バカでも風邪引くのな。

（後書き）

ジャンルのにはコメディーですが。

あんまり笑う感じではないかな。

じゃあなんだ、っていったら無駄話というほかないです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8066o/>

無駄話

2010年11月9日07時03分発行